

馬高縄文館キャプション

馬高縄文館

長岡の名物「火焰土器」の破片が発見された馬高・三十稲場遺跡に建つ博物館です。「火焰土器ミュージアム」の愛称で親しまれており、発掘された土器の展示・保管・研究の場となっています。

本館は 3 つの目的を持っています。

- ①遺跡の遺物を展示して伝えること。
- ②これらの日本の重要文化財を収蔵し、保管する。
- ③この遺跡の歴史とそこから回収された遺物について、学童などに教育すること。

馬高・三十稲場遺跡

縄文時代（15,000–900 年）に信濃川左岸にあった大規模な集落跡が、馬高・三十稲場で出土しました。

馬高遺跡は、遺跡の東側に位置しています。中期縄文時代、5,500 年と 4,500 年前のものになります。三十稲場遺跡は遺跡の西側を占めており、約 4,500 年前から 3,200 年前の後期のものです。

馬高遺跡は北の集落と南の集落のもので、後者は後に成立したものです。北部集落で、最初に火焰土器が発見されました。三十稲場遺跡では、南区に移り住みながら徐々に人口が増え、大規模な集落へと発展していった様子を見ることができます。

馬高・三十稲場遺跡は、1979 年にまとめて国史跡に指定されました。

火焰土器 重要文化財

1936 年に関原で最初に発見された火焰土器です。名前の由来は、土器の上部のデコレーションが、燃えあがる炎に似ていることから由来されています。

後に考古学者の中村孝三郎氏は、この土器を「火焰型 A 式 1 号 *Flame, A-type, no. 1*」と分類しています。その後、新潟だけでなく、全国の他の縄文時代の「火焰土器」の参考になりました。

馬高遺跡の火焰土器

ここでは、「火焰型」と「王冠型」の 2 種類の「馬高火焰土器」の例を見ることができます。

より一般的な型式は、4 つの大きな突起に鋸歯状のエッジが付いています。山頂に似た突起がある王冠型とは異なります。深鉢の深さは一般的に深いですが、馬高遺跡では浅い火焰型の珍しい例も出ています。ここでの例はいずれも、約 5000 年前の縄文時代中期のものです。

長岡の火焰土器

これらは、考古学者が長岡の遺跡で発見した火焰型・王冠型土器です。縄文時代（15,000–900 年）の出土品は与板、三島、枳尾など長岡市に 30 カ所以上あります。

火焰土器の構成

火焰土器は、その装飾的な要素によって 4 つのグループに分けられます。

A グループは、通常の炎と王冠の装飾が施された土器。

B グループは、矢印のようなくぼみがあることを特徴とする土器。

C グループは、東北南部全域に共通する「大木」土器の影響を受けた土器。

D グループは、表面に紐のマーク（縄文）がついているだけのシンプルな形の土器。

これらは、圧倒的に最も一般的なタイプの出土品です。

火焰土器の変遷

長岡遺跡で観察される火焰土器の変化には、三～四段階の変化があるように思われます。東山丘陵の山下遺跡の住民は、この地域で初めて火焰土器を作りました。

初期の土器はずん胴でくびれがはっきりしておらず、縁周りの細部が大きく欠けています。後期の馬高遺跡や岩野原遺跡の例では、装飾の縁が外側に向かって大きく広がっているような体のくびれの発達が見られる。

縄文時代中期、約 5000 年前に火焰土器が登場してからしばらくの間、火焰土器が栄えました。

火焰土器の分布

新潟県内ではこれまでに 150 カ所の遺跡から火焰土器が発見されています。その多くは信濃川中・上流（長岡市、十日町市、津南町）に集中しています。しかし、それ以外にも、日本海や佐渡地方にまで広がる他の河川敷でも遺跡が発見されています。

新潟県西部の発掘調査では、火焰土器の例が比較的少ないことが判明しています。

火焰土器の機能

火焰型と王冠型の土器を調べてみると、スス（火による黒化）の痕跡が見られます。このことから、人々はこれらの土器を使って料理をしていたという説を裏付けています。料理の種類によって違う土器が使われていたようです。また、お祭りや儀式に使われていた土器もあるかもしれません。火焰型土器は、装飾性のない土器と同じ条件で発見されていた事でも知られています。これらの土器が特定の場所に置かれたり、埋葬されたりした例はほとんどありません。

北のムラ 縄文中期前半

北部の村の住居の多くは、低い竪穴にありました。貯蔵穴、墓、共同廃棄物処理場の証拠もあります。

竪穴住居はほとんどが長方形で、長さ約 8 メートル、幅約 4 メートルでした。しかし、楕円形や円形のものもありました。

長方形の住居は一般的に放射状に配置され、村の中心部に向かって縦に向かい、最大 100 メー

トルの直径に及びました。

貯蔵穴と墓

各住戸のグループ内には、通常、幅約 1 メートル、深さ約 1.5 メートルの貯蔵穴がありました。底面は、最大の貯蔵容量を可能にするために幅広になっていました。

中央の広場の脇には埋葬場所がありました。村人たちは深さ 1～1.5 メートルの楕円形の穴に死者を埋葬していました。調査によると、大きな立石が目印になっていたようです。

ゴミ捨て場と落とし穴

村のはずれでは、大量の土器が入った穴の跡が発見されました。さらに調査した結果、この穴は廃棄物処理場として使われていたもので、捨てられた道具や壊れたものが回収されていたことが判明しました。

他の場所では、長さ約 1.5 メートル、深さ約 1 メートルの縦穴が発見され、鹿などの野生動物や熊などの大型哺乳類のための罠だったと考えられています。

集落の西には、重要な水源である小川がありました。

土偶

これらの女性像（dogu）は粘土で作られたもので、皿状の頭部と垂れ胸、ヘそが特徴的です。現存するサンプルのほとんどは胴体だけがそのままで、手足は胴体から分離しています。完全な形をして発掘されるのは稀です。

馬高の縄文人は、これらの土偶を儀式に使用したと考えられています。特に、五穀豊穡や安産、健康を祈願したのではないかと考えられています。

ビーズと耳飾り

縄文時代（紀元前 15,000～900 年）に、装飾用のビーズやイヤリングが好まれていました。特にヒスイの数珠はペンダントとして好まれました。これまでの発掘調査では数個しか出土していないため、非常に貴重なものとなっています。

また、耳たぶの穴に直接差し込む粘土製のイヤリングも普及していました。専門家は、これらのアイテムは装飾的なだけでなく、精神的な活動や宗教的な活動でも役割を果たしていたと考えています。

三十稲場遺跡 粘土採掘と住居

三十稲場の住居はほとんど円形のデザインです。中には石造りの囲炉裏があり、中央には土器が置かれています。

集落の南側には、長さ 6 メートル、幅 4 メートル、深さ 3 メートルの大きな縦穴があります。村人たちは良質な粘土を求めて、ここの表土の下を掘っていたようです。これが土器を作るための粘土の源になったと考えられています。このような粘土採掘場は、現在の新潟県の地域では希少です。

三十稲場式土器の成立と広がり

三十稲場式土器は、三十稲場遺跡で出土した資料に由来しています。へらなどの道具を使って模様をつけたり、穴を開けたりするのが特徴的です。縄文時代の他の土器とは異なり、蓋が付いていることが多いです。

特に信濃川・阿賀野川流域周辺では、三十稲場様式が多くみられています。火焰土器とともに、新潟県のこの地域特有の先史時代の文化を反映しています。